

30周年を迎えて



一つの夢を追って過ごす人生は理想であるが、夢に向かって平坦に過ぎゆく人生は稀である。新たな目標を選び、努力し、満足と悔悟を味わう過程を繰り返しつつ過ぎてゆくのが人生であろう。基礎生物学研究所のような組織の歩みも人生に似ている。研究所の歴史をみると、昭和41年に日本学術会議が内閣総理大臣に生物研究所ならびに生物科学研究交流センターの設立を勧告したことに始まり、昭和48年の学術審議会の報告の後、諸手続きが急速に進んで昭和52年(1977年)に基礎生物学研究所と生理学研究所が創設され、昭和56年からは一足先に作られた分子科学研究所とともに岡崎国立共同研究機構を構成することとなった。生物学研究所の設立に向けた昭和40-50年代の熱気は、我が国の戦後復興が一息つき、さらに経済の発展が見込まれる社会的雰囲気の中で、生物学といった基礎科学を充実することの必要と将来性が認められた証であろう。分子生物学や生物物理学が新たな潮流として生物学の中に入ってきたことも、生物学の研究者コミュニティの意識を変え、基礎生物学研究所が我が国の生物科学研究の中心としてコミュニティとともに研究を展開することが期待されたのであろう。設立後10年の間に基礎生物学研究所は細胞生物学・発生生物学・制御機構の三つの研究系の下に各数個の研究室(研究部門)を持ち、生物科学の様々な研究分野に対応した研究をリードするようになった。分子生物学や生物物理学の手法のみならず、多様な手法を用いた研究が進められた。時を同じくして国立大学においても生物学の新たな方向に対応した教室や研究室が続々と新設された。私自身も京都大学理学部に入学後3回生になった昭和44年に、新設された生物物理学教室に第一期生として所属し、分子遺伝学を専攻した。

昭和63年から平成9年までの次の10年間は、分子生物学の手法が生物学の様々な分野に浸透した時代である。平成元年には形質統御実験施設が設置され、遺伝子発現や種分化といったユニークな研究部門を持つ施設に成長した。私は昭和61年に東京大学から基礎生物学研究所の助手に転任し、形質統御実験施設の遺伝子発現統御第一研究部門においてモデル植物シロイヌナズナを用いて植物の分子遺伝学解析を始めた。その後多くの研究者がこの分野に参入することとなったが、新規な研究分野が短期間のうちに根付くことができたのは、客員部門制度や毎年のワークショップ開催援助、研究スペースと共同利用機器の充実など大学共同利用機関としての基礎生物学研究所の懐の深さのお蔭である。また、昭和63年には総合研究大学院大学が創設され、基礎生物学研究所に生命科学研究所分子生物機構論専攻が置かれて、博士課程の大学院生の教育と研究を分担することになった。

平成10年から19年までの最近の10年間における最大の出来事は国立研究所から法人に移行したことである。平成16年に大学共同利用機関法人自然科学研究機構が創設され、基礎生物学研究所は、国立天文台、核融合科学研究所、分子科学研究所、生理学研究所とともに自然科学研究のコアとして

新たな活動を開始した。この 10 年間にゲノム解析やイメージング技術が急速に進展し、生物科学の研究はより広範囲にかつ深くなり、新しい分野の連携が進んできた。基礎生物学研究所では、平成 13 年には情報生物学研究センターを、平成 18 年にはイメージングサイエンス研究領域を設置するなど、生物科学の新たな動きに対応している。平成 16 年には、従来の 3 研究系の枠を廃止して領域とし、研究内容の変化や研究者の興味にしたがったより柔軟な組織に改めた。平成 17 年には連携・広報企画運営戦略室を設置して担当の教職員を置き、広報活動を活発にするとともに研究連携やシンポジウム開催時の運営の充実を図っている。ヨーロッパ分子生物学研究所 (EMBL) との連携や生物科学研究の新領域の発掘を目的とした Okazaki Biology Conference を始め、トレーニングコースの対象を外国人学生や若手研究者に広げるなどの新たな試みも始められた。

設立後 30 年を迎え、基礎生物学研究所を取り巻く環境も変化してきた。年次計画を立て評価を受ける作業の重要さも増大している。基礎生物学研究所の役割と進むべき方向を確立することも緊急の課題である。研究所創立時の夢と生物学振興の期待に立ち帰り、研究者コミュニティとの連携と意志の疎通を図ることが必要であろう。私は平成 7 年に基礎生物学研究所を離れて京都大学に移ったが、平成 19 年より基礎生物学研究所長の責を担うことになった。基礎生物学研究所の創立と時を同じくして研究生生活を始めた私であるが、基礎生物学研究所のさらなる発展のためにお役に立つことを願っている。

基礎生物学研究所長 岡 田 清 孝